

■ 書 評 ■

西村大志 [編著]

『夜食の文化誌』

南山大学 林 雅代

本書の書評の依頼をいただいたとき、正直お引き受けするかどうか躊躇した。というのも、「夜食」の習慣が全くないと自認する評者に、「夜食」の研究書を批評するのは、いささか不適切と思われたからである。評者が抱く「夜食」のイメージは、深夜まで勉強にいそしむ受験生のため母親の手でふるまわれるもの、というものであり、そのような受験勉強とは無縁であった評者には、当然経験のないものであった。

本書の構成は、基本的には時系列に沿っており、第1章は、江戸期および明治期の「夜食」を提供する屋台の担い手とその階層について論じている。ここでは、屋台が都市下層労働者の生活と密接に結びついていったことが明らかにされている。続く第2章は、下層労働者のために簡易な食事を提供する存在であった屋台が、サラリーマンが大衆化してくる大正時代になり、仕事と家庭以外での憩いを提供する場へと転換していく過程を明らかにしている。また、第3章では、今日の「夜食」の代表格であるラーメンが、その異文化的なルーツをもっていかに日本社会に定着し、家庭の中でもその非日常性を保持しつつ、「夜食」の定番メニューとして定着していったかが分析されている。

ここまで読み進んで、評者には、「夜食」が典型的には、都市的、かつ男性的なものなのではないかという疑問が浮かんたのであるが、この疑問を解決したのが、若者の「夜食」の変遷を論じた第4章であった。そこでは、旧制高校・大学等のエリートらが寮生活の中で形成した「夜食」文化の一方で、残業・夜勤の男性社員の「夜食」が語られている。また、それは、「夜食」を禁じる家庭規範の外でこそ形成されたものであったことが、指摘されている。女性である評者が、「夜食」の習慣を持たないと認識していたのも道理である。高度成長を通じて、また、受験勉強の大衆化を通じて、即席麺などの「夜食」は家庭にも浸透していったが、その過程は、「おふくろの味」を「創られた伝統」として生み出すものであると同時に、「受験生に夜食を作る母親」が登場し、「夜食」が家庭規範の中に一定取り込まれていくというものであった。

「夜食」が高度成長期に定着したとすれば、それは一つには、朝・昼・晩の一日三食という摂食習慣と親和的な、オフィスでの昼間労働を基本とする人々が、社会の大多数を構成するようになったということ、背景としているはずである。「夜食」に関する農山漁村でのフィール

ドワークに基づく第5章が、このことを裏付ける。食事と食事の合間やハレの日に食べる寿司は、「夜に食べるもの」ではあるが、そこに暮らす人々には「夜食」という概念で語られるものではなかったことが、明らかにされている。本書は、「夜食の誕生」を期待されるタイトルながらそうではない（終章）とされてはいるが、評者としては、「家庭の中で食べられる夕食後の食事」という意味での「夜食」の成立を読み取ることが可能であった。

序章にも示唆されているように、「夜食を安易に前提にしすぎている」（11ページ）ことは、筆者らが研究を進めていくうちに気づかれたのであろう。本書を読んだ評者の素朴な実感は、「夜食」が「夜食」であるということは、決して自明のことではないのだというものであった。

食とは、生理的な欲求に根ざしたごく基本的な生活習慣のようでありながら、非常に階層化された社会的な行為である。このことは、自分の日常的な行為である食事習慣が、自分にとって、また、自分と同様の社会階層に属する人にとっては当然であるがために、つい看過されがちであるように思われる。筆者らの研究グループは、1970年代生まれの男性研究者を中心に構成されているが、もしここに、属性のかなり違う研究者が加わっていたとしたら、「夜食」の自明性に対する疑念が、ひょっとするとより早い段階で浮かび上がったのではないかと思われた。また、本書での「夜食」の定義は、「夜

遅い食事」および「夕食後の食事」というものであるが、では「食事」とは何なのか、単に「食べること」ととらえてよいのだろうか。特に、家庭規範との関係を考えると、害悪視されがちな「夜食」と、「一家団欒のおやつ」とには、「夜に食べるもの」という以上の差異がある。「夜食」を分析上の概念として定義するという方法が妥当なのか、疑問が残った。

とはいえ、上記のことは、本書の魅力を減じるものでは決してない。食事習慣を実証的に扱う上で利用可能なデータの限界に鑑みたとき、特に、第3章での小麦粉量等のデータを用いるという発想豊かで巧みな分析には、思わずうならされるものがある。

近年、深夜労働に従事する人々が増加し、コンビニエンスストア等の普及により、江戸時代・明治時代的な食事習慣の人々が増えていると思われる。「夕ご飯」「晩ご飯」という言葉に代わって、「夜ご飯」という言葉も、若い人を中心に使われているようだ。一方で、いわゆる「学力低下」問題が議論される際に、子どもの食事習慣がしばしば取り上げられることから、一日三食という食事習慣を支持し、「夜食」を害悪視する規範も、根強く存在する。「〇〇の誕生」が論じられるときは、それが衰退するときでもあるのかもしれないが、「夜食」を切り口に、今日の社会変動をどのように分析することが可能であろうかと、想像力をかき立てられる刺激的な一冊であった。

◆ B 6判 238頁 本体1,600円
青弓社 2010年1月刊